ISSN 0912-7402

特別号：2022年12月

NEWSLETTER

～ 水を守り　湖を救う ～

公益財団法人　国際湖沼環境委員会（ILEC）
本ニュースレターには、英語版もございます。

第19回世界湖沼会議に向けて琵琶湖から世界に発信！

国際湖沼環境委員会（ILEC）は2022年10月15日（土）にILEC科学委員を迎え、国際シンポジウム2022 “未来につなぐ湖沼の価値” を開催しました。

2022年3月にナイロビで開催された第5回国連環境総会（UNEA5.2）での決議「持続可能な湖沼管理」に向けては、「琵琶湖モデル」に象徴される住民と一体となる取組が重要です。そこで、エコツーリズムを切り口に若者や市民が湖沼の価値を再認識し、持続可能な湖沼管理について理解を深められるような取組を共有・議論し、世界に発信しました。本シンポジウムの成果は来年の秋に開催する「第19回世界湖沼会議（ハンガリー・バラトン湖）」における議論につなげます。

本イベントには会場とオンライン合わせて世界20ヶ国より175名の参加がありました。ご参加いただきました皆様に感謝申し上げます。

テ ー マ：「未来につなぐ湖沼の価値」

開催日時：2022年10月15日（土）　10:00-16:30
　第１部（午前の部）　湖沼のエコツーリズムコンテスト（最終審査会）
　第２部（午後の部）　国際シンポジウム2022 “未来につなぐ湖沼の価値”

開催場所：滋賀県立琵琶湖博物館ホール・別館（同時通訳有 / ハイブリッド方式）

主　　催：公益財団法人国際湖沼環境委員会（ILEC）・国連環境計画（UNEP）・滋賀県立琵琶湖博物館

参 加 者：20ヶ国175名

今号のトピック

■ 国際シンポジウム2022 “未来につなぐ湖沼の価値”
- 第１部　湖沼のエコツーリズムコンテスト（最終審査会）
- 第２部　国際シンポジウム2022 “未来につなぐ湖沼の価値”
- 本イベントの舞台裏

※ 報告書、ビデオ、プレゼンテーション資料等をILECウェブサイトにて公開しています。
https://www.ilec.or.jp/cooperation/mainstreaminglakes/#jis2022

国際シンポジウム2022　開会挨拶の概要

＜ILEC理事長　竹本 和彦＞

第5回国連環境総会（UNEA5.2）での「持続可能な湖沼管理」の決議は、今後の湖沼管理に向けた画期的な進展です。今こそ、すべての利害関係者が、持続可能な湖沼管理を実現する目標に向けて行動を加速する時です。市民の皆様に湖沼環境の価値をご理解いただくことは非常に重要です。

＜滋賀県知事　三日月 大造（ビデオメッセージ）＞

琵琶湖は私たちの暮らしを映す鏡であり、琵琶湖はその中だけを綺麗にしても決して輝くことはありません。琵琶湖の周りに住む我々が、湖沼環境のために生活を見直すことが必要です。琵琶湖を守ることは私たちの暮らしを見直すことでもあります。

第１部　湖沼のエコツーリズムコンテスト（最終審査会）

持続可能な湖沼管理に貢献する人材育成を目的に、若い世代からのエコツーリズムの提案を通じて、湖沼の価値を発見し、環境改善につなげる「湖沼のエコツーリズムコンテスト」を開催しました。

本コンテストには８組の応募があり、一次審査を通過した４組が最終審査の発表に挑みました。審査では、最優秀賞１組、優秀賞２組、特別賞１組に加え、ハイブリッド開催の特性を活かし、会場とオンライン参加者によるリアルタイム投票で視聴者賞を決定しました。また、表彰時には参加賞の中から素晴らしい提案に対してILEC賞を授与しました。

本コンテストの最優秀賞受賞・成安造形大学チームは、来年秋にハンガリーで開催される第19回世界湖沼会議に参加します。引き続き若い世代の活躍が期待されます。

〔審査員〕

○ 平安女学院大学教授（ILEC理事）　山本 芳華（審査員長）
○ 公益社団法人びわこビジターズビューロー会長　川戸 良幸
○ 滋賀県立琵琶湖博物館副館長　亀田 佳代子
○ 滋賀県琵琶湖保全再生課長　中嶋 洋一
○ ILEC科学委員会委員　アジット・パットナイク（インド）
○ ILEC科学委員会委員　アレハンドロ・フアレス（メキシコ）

視聴者賞特別審査員

○会場・オンライン参加の皆様

◎第１部　湖沼のエコツーリズムコンテスト最終審査結果

審査結果	所属	タイトル
最優秀賞 および 視聴者賞	成安造形大学	「たどる」を「たのしむ」エコツーリズム
優秀賞	NPO法人国際ボランティア学生協会（IVUSA）・京都外国語大学	びわ湖の研究者になろうツアー
優秀賞	立命館大学	トレイルランから始まるエコツーリズム
特別賞	一般社団法人SwitchSwitch	400年の歴史を体感する！ 伝統漁法サスティナブルツアー
ILEC賞（参加賞）	びわこ豊穣の郷・立命館大学	ホタルの飛翔する川づくりを取り入れた、 滋賀県の魅力を広めるエコツーリズム
参加賞	近江うららかネット・神戸大学	ヨシ・ツーリズム
	滋賀県立大学	若者にとって魅力的な三方よしのエコツーリズムとは？
	京都産業大学	新たなフードツーリズムで琵琶湖独自のエコツーリズムを！

コンテスト総評　＜審査員長　山本 芳華＞

どの発表も次世代を担う若い斬新な発想で、湖沼の価値をさらに磨き上げられる素晴らしいエコツーリズムの提案でした。ここからエコツーリズムそのものの概念も、また一歩発展するのではないかと期待しています。

◎最終審査発表内容の紹介

最終審査において発表を行った４組の提案をご紹介します。

全応募者（８組）の提案をILECウェブサイトにて公開しております。
そちらもぜひご覧ください。
https://www.ilec.or.jp/cooperation/mainstreaminglakes/#jis2022

提 案 者： 成安造形大学　佐々木 良緒 、平良 珠朱

タイトル：「たどる」を「たのしむ」エコツーリズム

ローカルキュレーターという仕組みを提案します。
建築家であれば素材や地形、農家であれば植生というように、同じ風景や場所を見ていてもそれぞれの違う視点を持っています。
それぞれの専門家（キュレーター）が違う視点で地域をガイドし、視点の変化を楽しみ何度も訪れたくなるツーリズムを目指します。

Q & A

- 亀田審査員「どのようにローカルキュレーターに協力を依頼しますか。」
- 提案者「地域マルシェに集う方々のつながりを足掛かりにしています。」
- 山本審査員長「価格設定方法と現段階での協力関係を教えてください。」
- 提案者「ターゲットは海外の40代から50代で、一人６万円という価格に十分見合うような食や宿泊施設の体験を提供する想定で料金を設定しました。海外向けのツアー団体にもこのツアーのプレゼンを見ていただき、ご協力は頂いているので、実行可能性があります。」

◎最終審査発表内容の紹介

提 案 者： NPO法人国際ボランティア学生協会（IVUSA）、
京都外国語大学　伊藤 佐恵子、田邊 有香、劉 昱泰

タイトル： びわ湖の研究者になろうツアー

次世代を担う子どもたちをターゲットとした、すでに企画・実現している「びわ湖の研究者になろうツアー」を提案します。

近年、子どもたちは教室で過ごすことが多く、実験や地域の自然に触れる機会が少なくなってきていることから、子どもたちが大学生と一緒に自然の中で地域の水資源の価値に気づく学びの場を提供します。

Q & A

- 亀田審査員「最初の段階で子どもの探求心をどのようにして見つけ、どのようにプロモーションをかけて参加者を募りますか。」
- 提案者「子供たちだけに売込むのは難しいので、まずは親御さんに向けて知らせることが大事だと思います。色々な所にポスターを貼り、気になるようなキャッチフレーズを使うことが目に留まる第一歩になるのかなと思います。」
- 川戸審査員「発表の中で、“in Area”とか“in Nature”という表現が、最後に“with”に変わりますが、“with”が突然出てくることに対する思い入れを聞かせてください。」
- 提案者「“自然の中で”自然を守るというニュアンスを大切にしていましたが、プレゼンテーション作成時に“自然と一緒に”ではないか？ と思い、普段あまり聞きなれないようなキャッチフレーズで、皆様の印象に残ってくれればと思い使いました。」

提 案 者：立命館大学　窪園 真那、畠 麻理奈、藤枝 樹亜

タイトル：トレイルランから始まるエコツーリズム

「滋賀県が誇る山々を見て、その保全に努めるトレイルラン」、「地域の方々と交流し、滋賀県の課題を見つけることを目的としたローカルウォーク」、「様々な立場の人の意見を取り入れるためのグローカル（グローバル＋ローカル）シミュレーションゲーム」の３つのプログラムを提案します。

山、川、人々の歴史などにおいて、持続可能な地域のサポートを行い、それらと一緒にクリーンな経済循環を実現しようと考えています。

Q & A

- アジット審査員「ツアーのユニークなセールスポイントを教えてください。」
- 提案者「トレイルランニングを含め、エコツーリズムを通じて、滋賀県の経済システムを活性化させられることです。」
- アレハンドロ審査員「どのように提案を実行し、実現していきますか。」
- 提案者「人からコメントをもらったり試行錯誤を繰り返しながら問題を乗り越えていきます。」

提 案 者：一般社団法人SwitchSwitch　阪野 真人、田辺 喜代春

タイトル：400年の歴史を体感する！伝統漁法サスティナブルツアー

福井の三方五湖で400年続く地域の伝統的な漁業のツアー体験プログラムを提案します。

400年続くということはそれだけで持続可能な漁業で、漁業資源が枯渇せずに続いてきた漁ということを参加者に伝えることで高い教育効果が生まれます。また、新たに体験メニューを増やすことで、漁業以外の副収入を発生させ、その参加費の一部を利用し、里山の保全と漁業資源の保護にもつなげます。

Q & A

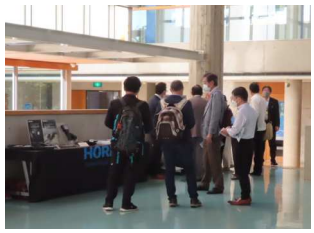
- 望月審査員「ハンバーガーや缶詰といった新商品も開発されてるようですが、ビジネスとして軌道に乗っていますか。」
- 提案者「缶詰は1,200個しか作れず、全部売っても120万円にしかならないので、ビジネスとして成り立ってるかというと微妙ではあります。それでも1,000個売れた実績は大きく、缶詰やバーガーを美味しいと言ってくれる人たちの存在が大きいと思います。」

◎国内外のエコツーリズム事例紹介

海外事例 #1 （ビデオ） 	バラトン湖開発局　エリザベート・シトゥク（ハンガリー） 「バラトン・フェルビデク国立公園におけるエコツーリズム」 バラトン・フェルビデク国立公園は、ハンガリー第2の観光地であるバラトン湖の北岸に位置し、非常に多くの観光客が訪れます。この地域は、自然、地質、文化遺産の面で非常に多様性に富んでおり、火山、湿地、広い渓谷、ブドウ畑、古城、教会などがあり、これらの価値を紹介するためには、綿密に計画されたエコツーリズムシステムが必要です。Covid19パンデミックの結果、人々が主に自然価値に目を向け自然生息地へのビジターが増加し、地域に大きな影響を与えています。これは、観光業にとって新たな課題を意味します。悪影響を最小限に抑えながら、人々の環境意識や行動を高め、かけがえのない価値を未来へつなぐには、常に新しい課題に対応する環境教育が非常に重要です。慎重に計画されたエコツーリズムは、自然や文化的価値の保護を促進し、地域社会を助け、人々の幸福を保証し、持続可能な発展を支えます。
海外事例 #2 （オンライン） 	インターナショナル・エコツーリズム・ソサエティ　代表　ジョン・ブルーノ（米国） 「ベトナム　バベ湖におけるエコツーリズム」 バベ湖は、3つの異なる湖から成り、生物多様性に富んでいます。また、周辺地域には2,000年にわたる文明の歴史があり、様々な少数民族や先住民が暮らしています。この遺跡はユネスコ世界遺産に登録されており、ベトナム政府は90年代後半から、この遺跡をより持続可能なものにし、地元の人々の歴史や習慣に対して責任を持つことに力を入れています。この地域はエコツーリズムや他の持続可能な産業により、生物多様性だけでなく、歴史、コミュニティ、文化、伝統の保全と財源の確保に成功した例であると言えることから、この地域を自分たちらしさを失わず、持続可能な開発を進めようとしている他の湖沼流域のコミュニティの手本となる可能性のある場所として取り上げました。
国内事例 #1 	東近江市エコツーリズム推進協議会　事務局長　丸橋 裕一 「滋賀県東近江市におけるエコツーリズム」 東近江市は琵琶湖の東にあり、合併によって非常に大きな街になっています。地域の56パーセントが森林で、気候帯も北が日本海側、南が太平洋側と非常に複雑で多様な自然環境です。東近江市エコツーリズム推進全体構想は、全国で21番目、滋賀県では初めての認定となりました。地域の人たちと一緒に行わないとエコツーリズムは進んで行きません。行政だけでなく地域の人といかに一緒にやっていこうという雰囲気に持っていくかが重要です。日頃のお付き合いで理解を得ていかねばならないので非常に時間がかかる地道な努力が必要です。
国内事例 #2 	マキノ自然観察倶楽部　谷口 良一 「滋賀県マキノ地区におけるエコツーリズム」 マキノは滋賀県と福井県との県境にあり、山を越えるとすぐ日本海です。山と里と琵琶湖がとても近い距離にあり、コンパクトにまとまっているので、春にはタケノコ掘やカヤックでの花見、子供たちと地域の食材を使った料理、夏には川遊びといった色々な体験をしていただけます。マキノの魅力を直接伝えたいという形でエコツーリズムを推進しておりますが、地域一体でやっていけるように、まずは地域の良さを知ってもらおうと小中学校の皆さんにも知っていただけるような活動もしているところです。

◎展示

琵琶湖博物館ホールにてILECより「湖沼の主流化」、滋賀県より「世界農業遺産（GIAHS）」と「Mother Lake Goals（MLGs）」のパネル展示を実施した他、別館でも本イベントにご協賛いただいた株式会社日吉 様、株式会社堀場アドバンスドテクノ 様の機器展示ブースを設置しました。



第２部　国際シンポジウム2022　“未来につなぐ湖沼の価値”

基調講演では、今年7月に認定された世界農業遺産『琵琶湖システム』や海外におけるエコツーリズムと湖沼環境保全についての話題提供がありました。

また、“湖沼の文化的サービスの持続可能な利用”をテーマとしたパネルディスカッションでは、国連環境計画（UNEP）、インドネシア政府、日本の環境省、滋賀県をパネリストとして迎え、今後の持続可能な湖沼管理に向けて人材育成、地域の参加、教育・法制度、政策の観点から議論が繰り広げられました。また、参加者へのリアルタイムアンケートの結果も発表され、議論に盛り込まれました。

モデレーターのアデリーナ・サントス・ボルハILEC科学委員会委員は、「地域の声を反映し、持続可能なエコツーリズム、湖沼管理に向けて行動することが重要です。」とまとめました。

◎基調講演

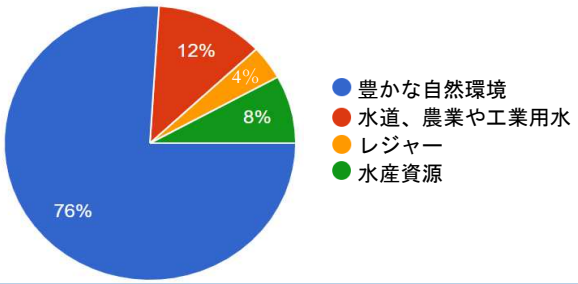
オンライン	同志社大学教授　大和田 順子
	「琵琶湖システム　世界農業遺産とSDGs観光の可能性」
	日本国内11地域の世界農業遺産（GIAHS）認定地域は、SDGsの17の目標のうち2番の「持続可能な農業」、15番の「陸の生態系」、その他には4番の「質の高い教育」に取り組んでいます。特に「質の高い教育」は地元の子供たちに農業遺産の学習を推進することに力を入れている地域が多くなっており、農業遺産を未来に繋ぐために欠かせない取組です。琵琶湖（滋賀県）の場合は、「うみのこ」、「たんぼのこ」、「やまのこ」といった地元の子どもたちに大変充実した学習機会を提供しているので、ぜひこれを地元の子供たちだけではく、近隣府県の子供たちや学生、更には大人にも提供してほしいと思います。
オンライン	グローバルネイチャーファンド　リビングレイクス代表　トーマス・シェイファー（ドイツ）
	「海外におけるエコツーリズムと湖沼環境保全」
	観光は、たとえ最も離れた場所であっても、環境に大きな影響を与えます。持続可能なエコツーリズムは、湖や湿地帯のような保護地域の管理をサポートすることができます。観光は本当に持続可能なものでなければなりません。また、地域コミュニティの収入が増えることで、湖や湿地のような保護区からの圧力が軽減されると考えています。そして、有名なスポーツプロデューサーの言葉を借りますが、「とにかくやってみる」ことをお勧めします。

◎パネルディスカッション（プレゼンテーションパート）

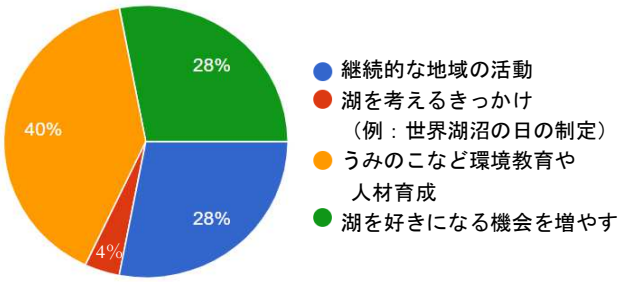
オンライン	国連環境計画（UNEP）　ハートウィッグ・クレマー（ケニア）
	人材育成の観点から「世界の水の危機への取組：データから行動へ～水質、能力開発、文化的側面に焦点を当てる」
	UNEA5で採択された「持続可能な湖沼管理」決議は、水域管理のあらゆる側面を静水システムに集中させるものです。この決議は大変重要で、UNEPに対して、あらゆるレベルで持続可能な湖沼管理の推進を支援するよう要請しています。
オンライン	インドネシア西スマトラ州副知事　アンディ・ジョイナルディ（インドネシア）
	地域の参加の観点から「インドネシア・西スマトラ州におけるエコ・エデュツーリズムとコミュニティ参画を通じた国家重点湖沼の保全について」
	エコ・エデュツーリズムとコミュニティ・エンゲージメントによる優先湖沼の保全については、第一にジオパークのマスタープランのサイトとしての湖水域の活用、第二に、手工芸品を通してのマニンジャウ湖のホテイアオイの繁殖抑制、第三にマニンジャウ湖の生物多様性保全地域および観光村や湖水観光の開発を行っています。
	環境省水環境課長　大井　通博
	教育、法制度の観点から「湖沼・水環境に係る教育・法制度の取組」
	日本において、湖沼を始めとした水環境の保全に取り組み、それを教育あるいはツーリズムに活かし、またそれを環境だけではなく、地域の振興にも役立てるべく、水循環全体を守っていくという形での取組を政府全体として進めています。
	滋賀県理事（琵琶湖政策・マザーレイクゴールズ, MLGs推進担当）三和 伸彦
	政策の観点から　「琵琶湖の文化的サービスの持続可能な利用」
	琵琶湖と人とが長い年月をかけて築き上げてきた共生関係と、それに根ざす文化の持つポテンシャルは非常に高いと思います。こうした滋賀の暮らしは世界の持続可能社会のモデルになりうると考えており、必ず滋賀を訪れる人の心に響くものであると確信しています。

リアルタイムアンケートの結果

Q1. “湖沼の価値”としてあなたが思い浮かべるものは何ですか。



Q2. あなたが考える湖沼の価値を守る・育てる、さらに次の世代につなげるのには何が必要でしょうか。



◎パネルディスカッション（ディスカッションパート）

ILEC科学委員会委員　アデリーナ・サントス・ボルハ（フィリピン）

参加者の皆さんへのアンケートでは、自然の美しさや湖の価値を感じておられる人が多い結果でした。ではどのようにして湖の自然美を維持するのか、それは私たち全員の課題です。行動を起こす呼びかけが必要となるでしょう。エコツーリズムの推進には、地域貢献や地域参加が不可欠です。より効果的にするためには、ツーリストが地域の文化を知る必要があります。また、エコツーリズムを持続可能にするためには、経済的な要因が非常に重要です。

国連環境計画（UNEP）　ハートウィッグ・クレマー（ケニア）

生態系の資源やサービスは、経済的価値だけでなく、文化的価値、娯楽的価値、精神的価値など様々な価値のオーナーシップを生み出す重要な役割を担っています。オーナーシップを生み出すには、コミュニティ全体を巻き込んでいくことが必要で、それらの価値を地域社会に継続的に提供し、価値に対する人々のライフスタイルにおける願望を管理し、導くことが重要です。

ILEC科学委員会委員　サンドラ・アゼベド（ブラジル）

エコツーリズムは長い道のりを経た後に実現するものだと思います。この長い道のりの間に、修正や環境教育のプロセスを考える必要があります。日本の状況、現実と比較すると、世界では違う状況にあります。観光業は時に略奪的な活動であり、環境的に考えるとより多くの問題を与えるため、結果的に地元の人々のことを考えると、目標の変更が重要です。

滋賀県理事（琵琶湖政策・マザーレイクゴールズ MLGs推進担当）三和 伸彦

琵琶湖が有限で、限度を超えて搾取し続けると持続可能ではないことを感覚的に理解することは非常に重要です。そのことに気づいている人が滋賀県にはたくさんいて、その人たちと一緒にその思いを伝え広げていくこと、その一つの表れがマザーレイクゴールズだと思います。これは滋賀県に元々漁業があり、獲りすぎないようにすることを琵琶湖があるおかげで感覚的に理解できます。そのことを多くの人に今、この時代に伝えていくことで、このエコツーリズムの過剰な搾取を抑制することにつながるのではないかと考えます。

ILEC副理事長　中村 正久

サステナブルだと思っていたものが実はそうでなかったということがあります。琵琶湖の話でも、食料はほとんど海外から輸入しているので、琵琶湖でサステナブルと思っていたけれど、実はどこかのサステナビリティを壊して生活しているということも含めて考える必要があります。琵琶湖モデルが国際的に重要な意味を持つということは、琵琶湖のような湖の場合にはこうだけれど、様々な湖があって、様々なサステナビリティの考え方があり、色々な視点で考えるきっかけを作っていくということも重要です。

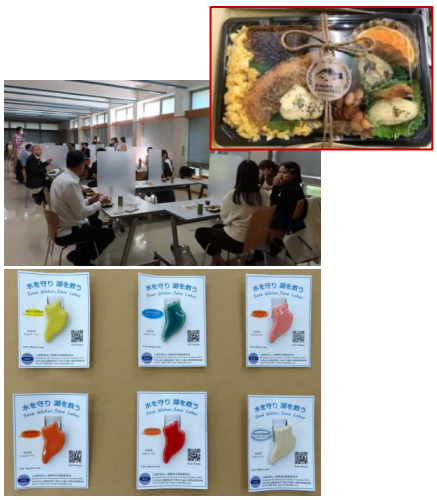
環境省水環境課長　大井 通博

環境教育体験型学習はそれぞれの現場でどのような学習をされて子供たちが何を感じるかというのはまさにそのプログラムによる気がします。滋賀県の事例に関していいますと琵琶湖というのは本当に良い教材だと思います。自然資源としても豊かであるし、人々の生活のとても近いところにある、まさにマザーレイクだと思います。特に滋賀県の子供たちには琵琶湖の自然を守るということを重視して受け止めた上、水のありがたさを理解してくれるようなプログラムが組まれていると思いました。

国際シンポジウム全体総括　＜ILEC理事　高橋 康夫＞

豊かな日本での湖沼管理の経験、特に琵琶湖での経験を共有できました。科学的な知識をベースに、我々の継続的な努力で世界の湖沼をより良くしていけると信じています。

◎イベントのこぼればなし



＜琵琶湖の幸に舌鼓！＞
昼食時には、コンテスト参加者とシンポジウム関係者の交流を目的とした「琵琶湖の恵を食べよう」を開催しました。参加者たちはビワマスやエビ豆などの琵琶湖の食文化を楽しみながら交流を深めました。

＜琵琶湖から世界に届け！＞
滋賀県内の17の企業・団体から協賛をいただき、琵琶湖から世界に発信した今回のシンポジウムでは、琵琶湖を象った信楽焼の記念バッジを製作しました。6色の記念バッジは、澄水、夕映などの多様な琵琶湖の美しさや価値を表現しており、「湖沼の価値」をみんなで未来につなぐ意思を込めています。

◎参加者の声

- 若者の斬新なアイデアが聞けて良かったです。
- 国内外の先行事例を聞くことができ勉強になりました。
- 琵琶湖が目の前に広がる会場が良かったです。
- 視聴者賞も会場で発表した方が良かったと思います。
- 通訳がスムーズで聞きやすかったです。
- 基調講演からたくさんの気づきがありました。
- エコツーリズムというテーマが良かったです。
- 音声が途切れた部分があったのが残念です。
- ハイブリッド形式だったので、会場でもオンラインでも同じ投票やアンケートに参加できて一体感を感じられてよかったです。

◎外部報道

本イベントは、びわ湖放送（2022.10.15 びわこ放送ニュース）および中日新聞（2022.10.16 朝刊）で報道されました。びわ湖放送については、ILECウェブサイトよりアーカイブがご覧になれます。

◎協賛企業・団体様のご紹介（順不同）

関西みらい銀行　近畿ろうきん　HORIBA Advanced Techno　HIYOSHI Ecological Services　新木産業株式会社
JTB　野村證券　日本メンテナスエンジニヤリング株式会社　琵琶湖汽船株式会社　株式会社髙木造園
UMI WAVE　GRANSNOW OKUIBUKI　長浜観光株式会社　日本旅行　たねや　近江の茶　みくる

2023年3月にニュースレターNo. 70を発刊します。次号は来年開催される「第19回世界湖沼会議（ハンガリー・バラトン）」特集です。お楽しみに！

INTERNATIONAL LAKE ENVIRONMENT COMMITTEE FOUNDATION (ILEC)

ILEC

〒525-0001　滋賀県草津市下物町1091　公益財団法人 国際湖沼環境委員会
－ 事務局 －　Tel: 077-568-4567 / Fax: 077-568-4568 / E-mail: infoilec@ilec.or.jp
Website: www.ilec.or.jp / Facebook: www.facebook.com/ilec.japanese

＊本ニュースレター最新号、バックナンバーは上記の当財団ホームページでもご覧になれます。